

グジャラート協同組合農業調査委員会著

『グジャラートの協同組合農業』

The Gujarat Co-operative Farming Survey Committee, *Co-operative Farming in Gujarat*. Bombay: The Indian Society of Agricultural Economics, 1959. Pp. ii+137.

インド農村社会の新しい社会経済秩序は村落パンチャヤトと協同組合にあるといわれるが、本書はその後者を対象とし、その分野で指導的地位にあるボンベイ州のグジャラート地方の協同組合を調査した報告書である。

調査目標は、(1)協同組合の3つの型のうちいずれが望ましいか、(2)政府からの援助は正当かつ十分であるか、(3)農村社会のさまざまな関係に協同組合はいかなる貢献をなすのか、という3課題であり、それを84組合を対象とした一般調査とそのうちの集中研究および10の詳細なケース・スタディの3つの方法で調査している。

本書の構成は、I序、II成長過程、III構成員、IV土地、V財源、VI開発、VII集中研究、VIII経営管理、IX結論の9章からなり、結論の要約のところでも上記3目標に関する実績(相対的に成功している面)を述べ、勧告のところでも従来の欠陥と今後の方向を22項にわたり打ち出している。なお本文の豊富なデータと付録の中の6つの統計、対象組合リスト、調査計画表もそれぞれ有用である。

T・M・フレイザー・Jr.著

『ルセンビラン—マレー人の漁村』

T. M. Fraser, Jr. *Rusembilan: A Malay Fishing Village*. New York: Ithaca, Cornell University Press, 1960. Pp. xi+248.

Rusembilan はマレーに近い Pattani の町から約3.5マイル離れたタイ南部の漁村である。この報告は1956年2月から9月までの著者の Rusembilan 滞在によって得られた資料によるものである。調査目的は、このマレー人の村(政治的にはタイに属する)の経済的基盤、社会構造、生活様式をみて、村落内に起こりつつある変化とその要因を調べ、またこの村がタイ人の村とどの程度異なっているかを調べるにあった。

今までタイの農村の実態調査は乏しく、特に南部での調査はきわめて少なかった。タイの南部にあるマレー人の村に関しては、著者のこの調査が初めてのものである。Lauriston Sharp 氏はこの報告を *Cornell Studies in Anthropology* の1つに加えると述べている。

J・P・ポーリュス著

『ベルギー領コンゴの公法』

J. P. Paulus. *Droit Public du Congo Berge*, Bruxelles: Université Libre de Bruxelles, Institut de Sociologie Solvay, 1959. Pp. ii+432.

本書は植民地研究シリーズの第1巻として出され、その目的は「ベルギー領コンゴの現行公法を示すことにおいて、それを導いた事情を叙述するものではない」(序文)とある。第1部「ベルギーとコンゴの関係、コンゴ法の地位」(歴史的展望、コンゴ法の本国に対する関係、コンゴ法の独自性、コンゴ固有法との関係)、第2部「立法権」(立法権行使の一般、諸立法機関、特別立法による法律、立法に関する諸規定)、第3部「行政権」(コンゴ政府と本国の諸機関、コンゴ政府と地方行政、コンゴの生活条件からくる諸問題と黒人の進化)、第4部「司法権」(一般的展望、司法原則、検事と行政政府、司法組織、本国とコンゴ、弁護士)、第5部「個人の権利」(序論、政府権力を制限する諸権利)、第6部「コンゴの軍隊」(一般的展望、立法、本国の軍事基礎、警察)、第7部「通貨制度」、第8部「国旗と印章」および付録として各種の関係国際法からなる。

J・ドゥフィー著

『ポルトガル領アフリカ』

James Duffy. *Portuguese Africa*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1959. Pp. 389.

ポルトガル領アフリカの主要地域アンゴラとモカムビクは、その面積において西欧に匹敵し、450年にわたってこれを支配してきたポルトガルを今日世界の主要植民国にしている。この地域はアフリカでも最も遅れた所であるが、過去20年の間に驚くべき変容を遂げており、いまやポルトガル領アフリカの役割を離れて赤道下アフリカの運命を論ずることはできない。しかしこの地域は物質的進歩をみせた半面ポルトガル人の支配と搾取は旧態依然たるものがある。本書は英語によるこの地域の歴史に関する最初の包括的労作である。その歴史は1500年のBantu しゅう長との接触から、1885年のベルリン会議を経て現在の Salazar 政権にまで及んでいる。本書は征服者と宣教師、植民者と奴隷商人、商人と犯罪者、20世紀における現代アフリカ植民地を樹立した3世代の政治家たちの物語である。

E・W・ルーサー著

『エチオピアの現状』

Ernest W. Luther. *Ethiopia Today*. Stanford California: Stanford University Press, London: Oxford University Press, 1958. Pp. xii+158.

近年諸外国との接触の増大によりふたたびその国名を世に知らしめたエチオピアであるが、従来この国の海外での紹介には多くの誤りがあった。本書はこうした多くの誤解の是正を意図するものである。本来経済学者であり、現地でエチオピア銀行付き経済専門家であった著者の体験は、経済の分野において最も深く、本書がエチオピアの経済に焦点を合わせているのも当然のことであろう。

本書は、概観書として一応エチオピアの全面を網羅している。最初に自然・人文環境などが概観され、ついで農業、工業、商業、金融などの問題を取り上げて経済の現状を浮き彫りにする。結論において現在また将来のエチオピア経済に対する封建遺制などの消極的作用、活発な対外政策などの積極的作用について簡単に考察を加えて結んでいる。

数少ないエチオピアに関する文献のうちで、本書は概観に最適のもの1つであろう。

J・M・アプトン著

『解題、近代イラン史』

Joseph M. Upton. *The History of Modern Iran: An Interpretation*. (Harvard Middle Eastern Monographs 2) Cambridge: Harvard University Press, 1960. Pp. 163.

著者は、イランの歴代政府の内・外政策の成功を決定づけてきた、イラン人社会の特色に基礎を置いているイラン近代史の描出を行なうのがこの著述の目的であると言ひ、その特色とは、近代イラン史の流れに対して強弱の波はあるが持続的な影響を及ぼしてきている民衆の態度とその実行とが注目されることにほかならない、と前置きしている。

ついでかれはペルシャ人であれば、民衆の態度や実行について記述することにより、その国土、国民、文化について西欧人に理解しうるように説明することができるであろうが、このような民衆の態度や実行についての論述が公にされていないために、イラン人民の生活や文化についての一面的な感嘆に酔っていることは、近代イラ

ン史の評価の正当性を妨げることになると反省しつつ、歴史の流れを法則と実際とのあいだの対比において注意深く把握しなければならないと警告を発している。

さらに、人はすべての事実について理解し、把握することは困難であるから、断定を下すことは避けてきたのであるが、自分独自の理解や先入観および気まぐれなどにより個性化されることは止むをえないものであらうと思われるので、ねがわくは、この出版が諸々のイラン史に対する説明の客観性を正当化したり、確認したりすることのできるような刺激を与えることを期待したいと結んでいる。したがって近代イランの歴史的な流れと位置を理解し、追求するためには一読すべき書物の1つであると思われる。

E・ハンター著

『過去・現在—アフガニスタンでの1年』

Edward Hunter. *The Past Present: A Year in Afghanistan*. London: Hodder & Stoughton, 1959. Pp. 352.

アフガニスタンはいまから600~700年前、シルクロードの通る世界の十字路であった。だが海上交通時代の訪れはこの国をほとんど世界史の地図から消し去ってしまった。そして現に訪れてみた著者の目に写ったものは西欧の中世に相当する姿そのままであった。だが外に向かって国々閉ざされてきたこの国の国境の四囲にも20世紀の波は押し寄せていた。現代史の激流を避けるには、この国はあまりにも地理的にその潮流の中心に位置している。イランからの進出が思わしくなくなったソ連は、アフガニスタンに歩を進め、ブルガーニン、フルシチョフがこの国を訪れて国家予算の4倍に及ぶ借款を約して世界にセンセーションをまき起こし、アメリカも巨大な灌漑工事ははじめ数々の援助にのり出した。

こうして数百年来忘れられてきたこの国がふたたび、突如として世界史の十字路に位置づけられつつある。そしてみずからも激しくその姿を変えつつある(現に本書の内容はすでに out of date もはなはだしいと、駐日アフガニスタン大使は強く指摘している)。

しからばこの国はどのような過去をもち、現在どのような方向に進もうとしているのか、これをアメリカの海外記者として豊かな経験をもつ著者が、1年間の滞在中の見聞をもとにして描こうとしたのがこの本である。